

## M34b 1994年2月20日に発生したH $\alpha$ フィラメント消失について

新川雄彦(通総研・平磯)、黒河宏企(京大・花山天文台)、秋岡眞樹(通総研・平磯)、  
越石英樹(宇宙開発事業団)、Shinzo Enome、花岡庸一郎(国立天文台)、  
LIU Yang(北京天文台)

京都大学飛騨天文台のフレア監視望遠鏡(FMT)は、フレアやフィラメント消失といった突発的に発生する活動現象を捉えることを目的にした望遠鏡で、H $\alpha$  センター、H $\alpha$  + 0.8Å、H $\alpha$  - 0.8Å、プロミネンス、連続光、の5種類の太陽全面像を同時に、2秒または4秒間隔で録画して、太陽面を常に監視している。

その最大の特色は、H $\alpha$  センター、だけでなく、H $\alpha$  + 0.8Å と H $\alpha$  - 0.8Å も観測しているため、視線方向の運動の様子を知ることができるということである。これはフィラメント消失のような現象の研究には非常に有効である。

すでにいくつものフィラメント消失がFMTで観測されているが、その中でも1994年2月20日に発生したNOAA7671におけるフィラメント消失とそれともなうH $\alpha$  重要度3B、X線クラスM4のフレアは、典型的なLDE型のフレアであり、地球近傍の宇宙空間に大きな影響をもたらしたという意味で重要な現象である。

この現象のフィラメントの運動や、消失に至るまでの発展の状況などを、平磯のH $\alpha$  データベースや野辺山電波ヘリオグラフなどのデータと合せて解析したので、結果を報告する。